

佐久市埋蔵文化財調査報告書第33集

HIJIRI HARA

聖原遺跡 VII

SHIMO SO NE

下曾根遺跡 I

MAE TÔ BE

前藤部遺跡 2

佐久市大字長土呂遺跡群聖原遺跡VII調査報告書

佐久市大字長土呂芝宮遺跡群下曾根遺跡 I 調査報告書

佐久市大字小田井栗毛坂遺跡群前藤部遺跡 I 調査報告書

1994. 3

東京電力株式会社千曲川電力所
佐久市教育委員会



聖原遺跡航空写真(南西上空から。株式会社共同測量撮影)



聖原遺跡 VI、聖原遺跡 VII (株式会社共同測量撮影)



聖原遺跡 VII
調査地点全景
(南方から)

例 言

1 本書は、平成5年度に発掘調査を実施した長野県大字長土呂長土呂遺跡群聖原遺跡Ⅶ、大字長土呂芝宮遺跡群下曾根遺跡Ⅰ、大字小田井栗毛坂遺跡群前藤部遺跡Ⅰの発掘調査報告書である。整理作業・報告書刊行は、平成5年度に行った。

2 本調査は北佐久線No.62・No.63・No.65鉄塔移設工事に関わり、株式会社東京電力千曲川電力所から委託を受け、佐久市教育委員会が実施した。

3 遺跡の所在地および面積

長土呂遺跡群聖原遺跡Ⅶ	面積－123.21m ²
佐久市大字長土呂字長土呂隠し3	
芝宮遺跡群下曾根遺跡Ⅰ	面積－17m ²
佐久市大字長土呂字下曾根41-1	
栗毛坂遺跡群	面積－144.01m ²
佐久市大字小田井字前藤部613	

4 調査期間

試掘調査－平成5年9月16日・22日

発掘調査－平成5年9月16日～平成5年9月30日

整理調査－平成5年10月1日～平成5年10月15日

平成6年2月1日～平成6年3月25日

5 挿図の方位は、真北を指す。

6 本書掲載図の作成は、小林よしみ、柳沢豊志子が担当し、執筆・編集は林幸彦が行った。

7 本書および関係資料等は、佐久市教育委員会で保管している。

目 次

巻頭図版

例言

目次

I 調査の概要

- 1 調査の経緯と経過…………… 1
- 2 調査の体制…………… 2
- 3 遺跡の位置と周辺遺跡…………… 2

II 聖原遺跡VII

- 1 聖原遺跡VIIH 1号住居址…………… 5
- 2 聖原遺跡VIIH 2号住居址…………… 7
- 3 聖原遺跡VIIH 3号住居址……………11
- 4 聖原遺跡VIID 1号・D 2号土坑……………13

III 下曾根遺跡I

- 1 下曾根遺跡IH 1号住居址……………14
- 2 下曾根遺跡IH 2号住居址……………15
- 3 下曾根遺跡IH 3号住居址……………16

IV 前藤部遺跡2……………17

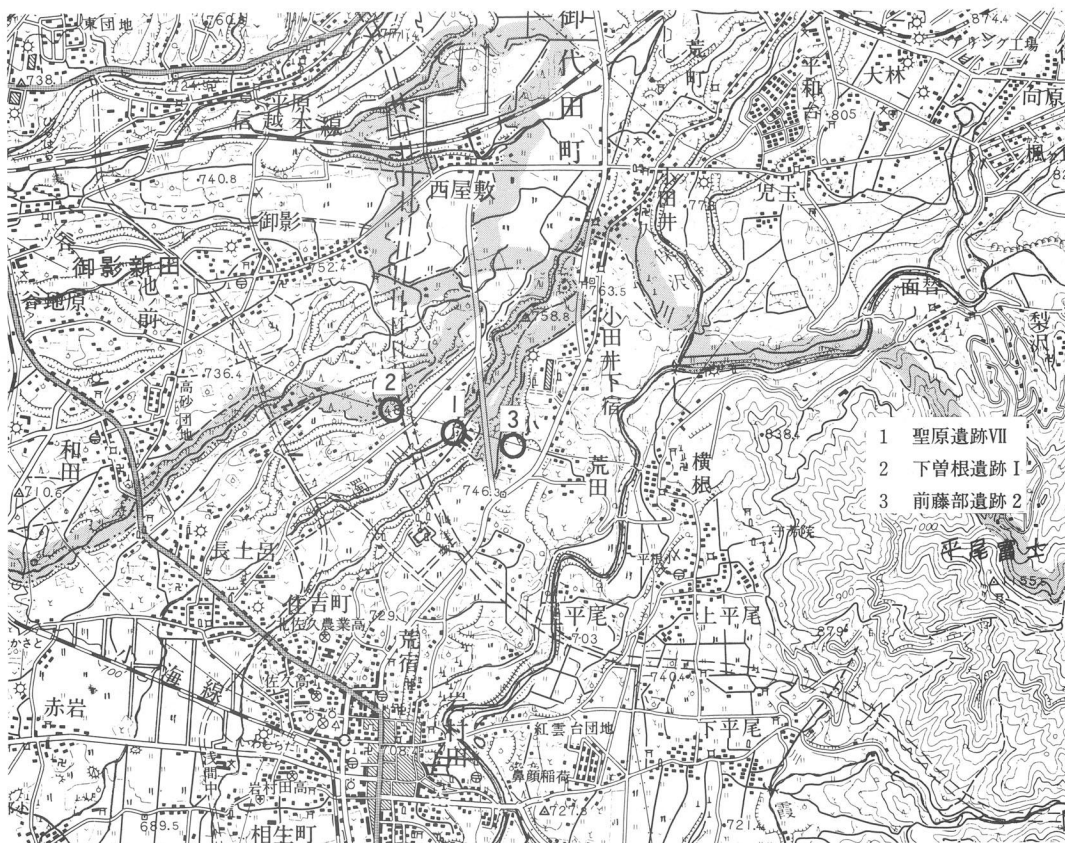
写真図版

I 調査の概要

1 調査の経緯と経過

佐久市北端の小諸市境には、浅間山から南西に放射状に「田切り」地形が展開する。この細長い台地上には多くの遺跡群が存在する。佐久市内では、最近の開発が集中している地域である。

今回、東京電力株式会社千曲川連力所が北佐久線の送電鉄塔移設を計画した。北佐久線No.62が芝宮遺跡群内に、No.63が長土呂遺跡群内に、No.65が栗毛坂遺跡群内に、それぞれ移設・建て替えられることになり、試掘調査を実施した。その結果、芝宮遺跡群から竪穴住居址が3棟検出され、下曾根遺跡Iとした。長土呂遺跡群からは竪穴住居址3棟と土坑3基が検出され、聖原遺跡VIIとした。栗毛坂遺跡群前藤部遺跡2からは遺構・遺物とも検出されなかった。協議の結果、設計変更等難しく記録保存のための緊急発掘調査を、東京電力株式会社千曲川電力所から委託を受けた佐久市教育委員会が実施することとなった。



第1図 聖原遺跡VII、下曾根遺跡I、前藤部遺跡2位置図 (1:50,000)

2 調査体制

◎調査受託者 教育長 大井季夫

◎事務局（平成5年度）教育次長 奥原 秀雄

埋蔵文化財課長 上原正秀 管理係長 小林泰子

埋蔵文化財係長 草間芳行

埋蔵文化財係 高村 博文 林 幸彦 三石 宗一 須藤 隆司 小林 真寿 羽毛田 卓也
富沢 一明 上原 学

調査担当者 林 幸彦

調査員 五十嵐 勝吉 上原 芳男 小林 よしみ 清水 六郎 篠崎 清一 関口 正
森泉 欽一 柳沢 豊志子 山崎 直

3 遺跡の位置と周辺遺跡

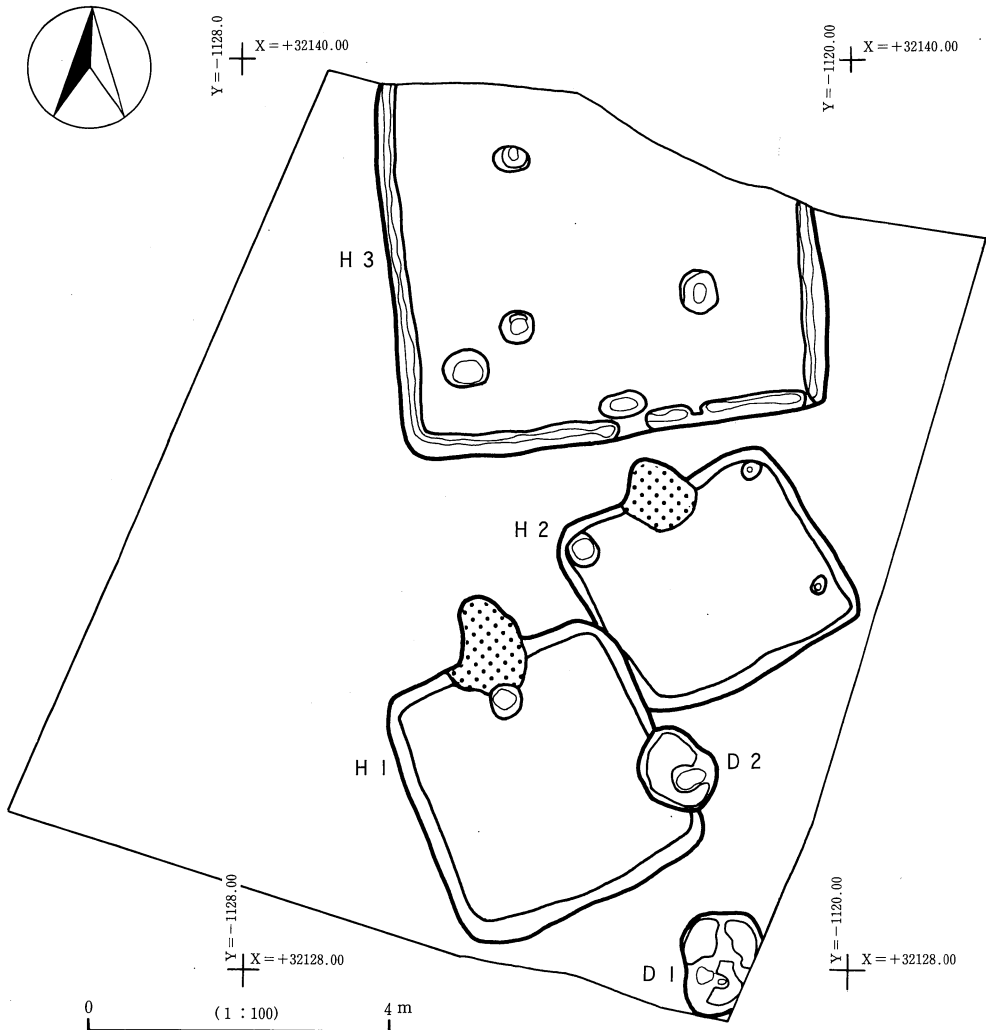
浅間山の南麓には、顕著な「田切り」が南方・南西方に向けて放射状に展開している。芝宮遺跡群、長土呂遺跡群、栗毛坂遺跡群は、この「田切り」の台地上にあり、佐久市の北端に位置している。標高は、730m～750mを測る。付近は、水田圃場整備・高速道路・新幹線・インター周辺開発などにより、大規模に地形が形変している。これらの開発に関連し、長野県埋蔵文化財センター、小諸市教育委員会、御代田町教育委員会、佐久市教育委員会により緊急発掘調査された遺跡は20箇所を越える。

今回の調査対象地周辺では、特に古墳時代～平安時代の遺構が多数検出されている。佐久市流通業務団地造成に関わる長土呂遺跡群聖原遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵの調査では、1994年度までに堅穴住居址841軒・掘立柱建物址720棟等が検出されている。上信越自動車道に関わる小諸市中原遺跡群では堅穴住居址140軒・掘立柱建物址37棟等が、佐久市芝宮遺跡群は堅穴住居址245軒・掘立柱建物址70棟等が、佐久市長土呂遺跡群では堅穴住居址52軒・掘立柱建物址19棟等が検出されている。また、土師器、須恵器、磁器、農具、海獣葡萄鏡、石製私印、皇朝十二銭等の遺物にも膨大なものがある。

さらに、北方では上信越自動車道に関わる野火付遺跡、前田遺跡、宮ノ反A遺跡、小田井・御影地区圃場整備に関わる野火付遺跡、鋳師屋遺跡群、前田遺跡、十二遺跡、根岸遺跡等が調査されている。標高は、750m～770mを測る。検出されたのは、従来予想もされなかった古墳時代末から平安時代の大規模な集落であり、多量の土師器、須恵器、農具を中心とする鉄器、和同開珎・萬年通寶などの皇朝十二銭であった。しかも、最近では、古墳時代前期末から中期初頭にかけて

II 聖原遺跡VII

長土呂遺跡群聖原遺跡は、佐久流通業務団地造成により遺跡が破壊されるため1989年度から記録保存調査を開始した。本年度で5年目になる。付近では佐久流通業務団地造成地の西に接した上信越自動車のアクセス道路工事に際し上聖端遺跡が記録保存調査されている。古墳時代・奈良平安時代の竪穴住居址47軒、掘立柱建物址21棟等が検出されている。東に近接して民間企業の事務所建設に際し聖原II遺跡が御代田町教育委員会によって調査されており、平安時代前半の竪穴住居址3軒、掘立柱建物址4棟等が検出されている。

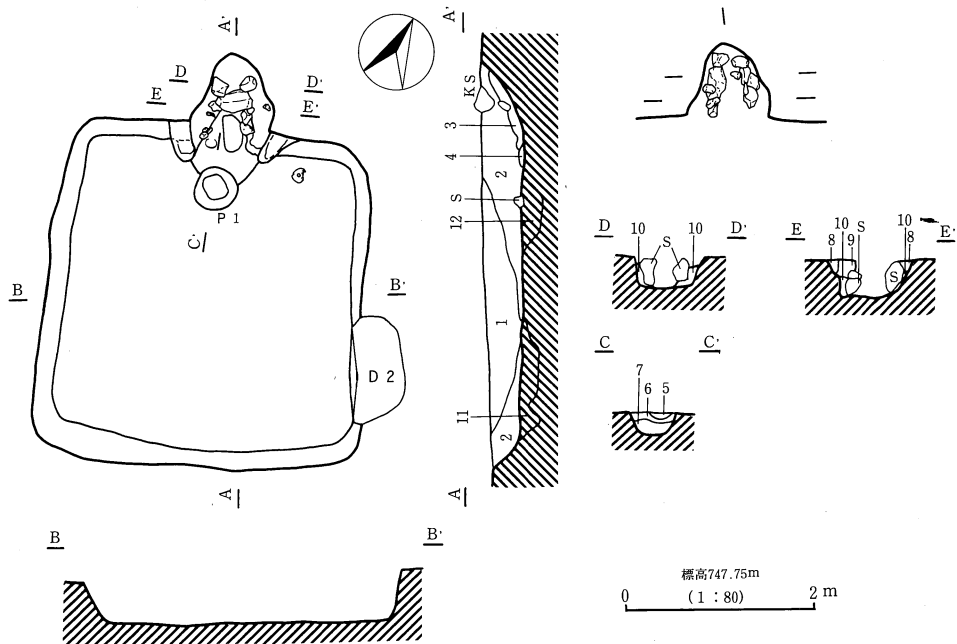


第3図 聖原遺跡VII調査全体図

聖原遺跡Ⅶの調査範囲は、1基の送電塔基礎部分にあたる123.21㎡の面積であったが、堅穴住居址3棟、土坑2基がそれぞれ検出された。また、調査進行中に調査地点の北側において、仮設の送電線支柱が建設されることになり、やむを得ず支柱部分と7箇所を支線基礎部分掘削時に立ち会った。これらの箇所からは、遺構・遺物の検出はなかった。

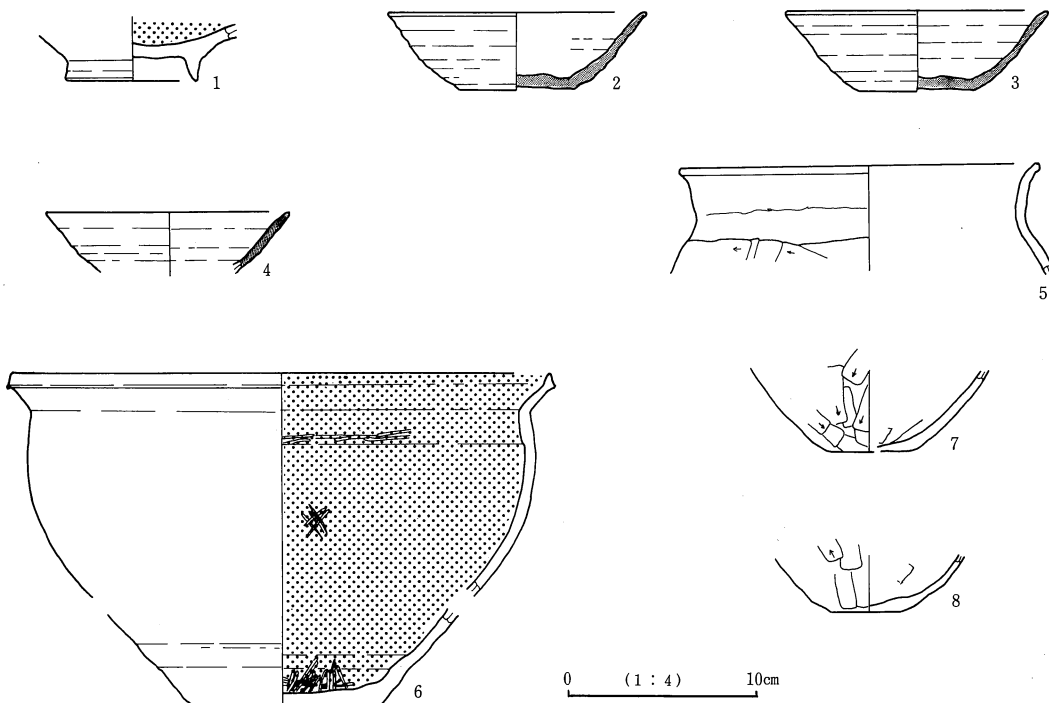
1 聖原遺跡ⅦH 1号住居址

本住居址は、D1号土坑に東壁の一部を破壊され、H2号住居址の西壁を破壊している。



- | | | | | | | |
|-----|---------|-----------|---------------------|-----|--------|-----------|
| 1層 | (黒褐色土) | 7.5YR 2/2 | 7.5YR 4/4をブロック状に含む。 | 5層 | (暗褐色土) | 7.5YR 3/3 |
| 2層 | (暗褐色土) | 7.5YR 3/3 | 7.5YR 4/3をブロック状に含む。 | 6層 | (褐色土) | 7.5YR 4/6 |
| 3層 | (暗赤褐色土) | 5 YR 3/3 | 焼土ブロック・焼土粒子を含む。 | 7層 | (黒色土) | 7.5YR 2/1 |
| 4層 | (黒褐色土) | 7.5YR 2/2 | 灰・炭 | 8層 | (暗褐色土) | 10YR 3/3 |
| 6層 | (褐色土) | 7.5YR 4/6 | 灰を少量含む。 | 9層 | (褐色土) | 10YR 4/4 |
| 8層 | (暗褐色土) | 10YR 3/3 | ローム・バミスを含む。 | 10層 | (暗褐色土) | 10YR 2/3 |
| 9層 | (褐色土) | 10YR 4/4 | ローム主体 | 11層 | (橙色土) | 7.5YR 6/6 |
| 10層 | (暗褐色土) | 10YR 2/3 | ローム・バミスを少量含む。 | 12層 | (褐色土) | 7.5YR 4/4 |
| 11層 | (橙色土) | 7.5YR 6/6 | | | | |
| 12層 | (褐色土) | 7.5YR 4/4 | 7.5YR 5/8をブロック状に含む。 | | | |

第4図 聖原遺跡ⅦH 1号住居址実測図



第5図 聖原遺跡VIII 1号住居址出土土器実測図

平面形態は、南北3.6m東西3.3mのややコーナーが丸みをおびる隅丸方形を呈する。壁残高は24～42cmで壁は東壁が急に南壁と西壁は緩やかに立ち上がっている。南北軸方向はN-24°-Wを指す。床面は各壁直下を除き堅緻であった。床面下の掘り方は、四方の壁よりが20cmで中央付近はほとんど掘りこまれない。貼り床は、明褐色土をブロック状に含む褐色土を主として用いている。ピットは、カマド前面に1個確認できただけで柱穴に該当するピットは検出されなかった。P1は覆土中ほどに灰が認められた。南北48cm東西42cm深さ25cmを測る。

覆土は大きくには2層に分層できた。1層は褐色土をブロック状に含む黒褐色土、2層は褐色土をブロック状に含む褐色土であった。カマド部分の3層は、焼土ブロックを含む暗褐色土、4層は灰・炭を含む黒褐色土である。

カマドは、北壁中央に設置されていた。両袖は僅かにその痕跡を留めるのみであった。煙道部は比較的良好に残っていた。煙道部の両側は、面取りされた小さめの軽石や安山岩の割石を芯とし、40cmを測る細長い軽石を天井石としていた。両袖の芯とした礫を固定するためにいったん埋めた黒褐色土や地山を小さく掘りくぼめたピットが確認できた。燃焼部には、支脚石を埋め込んだ小ピットが2個みられ、甕の二つ掛けが考えられる。なお、カマド焚き口・燃焼部の底面と床面の掘り方とは深さが一致していて、住居の掘り下げ時にあらかじめカマドの設置場所が決められて

いたことがうかがえる。

出土遺物には、土師器の高台付坏・鉢・甕・台付甕、須恵器の坏・蓋・甕がある。

第5図1の内面黒色の土師器高台付皿と3の須恵器坏は、貼り床下出土片とカマド付近4層内出土片が接合した。2の須恵器坏は、カマド東脇床面上から出土した。4の須恵器坏は、2層内出土片と床下出土片が接合した。5の土師器鉢と6・7の土師器甕は、カマド付近4層内出土片と2層内出土片が接合した。2・3の須恵器坏は、いずれも底部未調整の回転糸切り痕をみせている。5は土師器鉢としたが内面黒色土器であり、あまり類例を知らない。底部に回転糸切りが、体部上半にロクロ整形痕が窺える。6は土師器甕で口縁部が「コの字」化をみせはじめている。

以上の土器群は、平安時代（9世紀前半）に位置づけられよう。

2 聖原遺跡VIIH 2号住居址

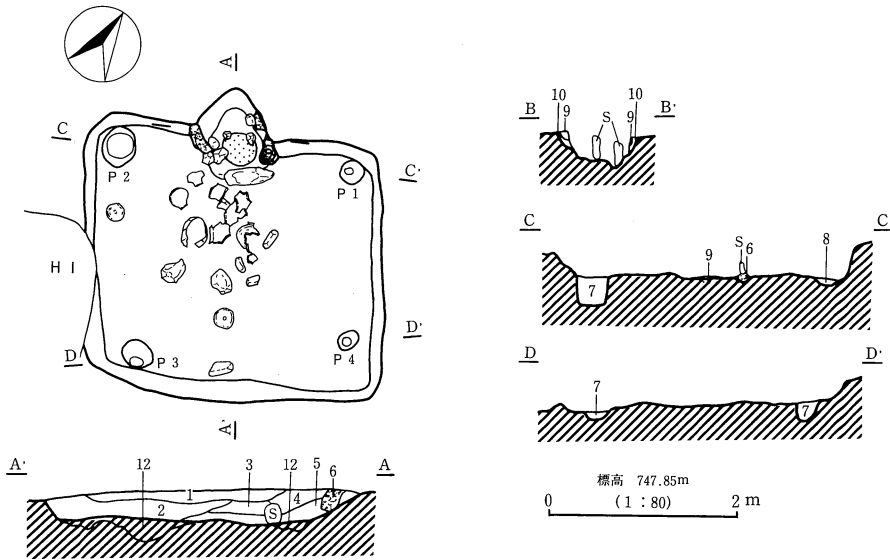
本住居址は、H1号住居址に西壁の南側半分を破壊されている。平面規模は南北2.86m東西3.16m、平面形態は隅丸長方形を呈する。壁残高は地形の傾斜に沿って深く北壁から東壁が24～33cm、西壁から南壁が16.5～19cmを測る。南北軸方向は、N-27°-Wを指す。床面は四方の壁直下を除き堅緻であり、中央より東壁側がやや高い。全体に少しの凸凹がみられる。床面下の掘り方はカマド付近を除き10～45cmで、貼り床は黒褐色土の混じる褐色土を主に用いていた。支柱穴のP1・P2・P3・P4が西壁に向けて開く台形状に配され、深さは12・36・20・24cmを測る。P1・P2・P3は、壁に接して、P4のみ壁からやや離れている。カマドは北壁中央に設置されていた。燃焼部の焼土が厚くみられ、2個の細長く加工された軽石の支脚石が使用時の状況を残すのみで壊れた状況であった。袖部や煙道部の芯に使用されたと考えられる面取り軽石や安山岩・凝灰岩がカマド前面から南壁にかけた床面状に散乱していた。東側の袖部には芯とされた面取り軽石が小ピット内に埋められていた。また、両袖部に少量の粘土が残存しており、軽石などを芯に使用し粘土でそれを覆ってカマドがつくられていたことが窺える。天井石と思われる長さ52cmの凝灰岩が焚き口あたりに落下していた。8層の焼土は、カマド下の埋め土が焼けこんだものである。なお、支脚石がもう1点出土しており、甕の三掛けも想定できる。

出土遺物には、土師器甕・小形甕、須恵器蓋・坏・甕・横瓶・四耳壺、台石がある。土師器坏や高台付碗は皆無で小片すら認められない。

ほとんどがカマドから西壁にかけた床面上から出土した。第9図1の安山岩台石は南壁中央直下の床面上から、第7図2の須恵器蓋は西壁寄りの床面上から出土した。

第7図1・2は、宝珠形のつまみを持つ須恵器蓋である。

3・5・6は須恵器坏である。3は回転糸切り未調整の底部で外面の体部および内面の体部か



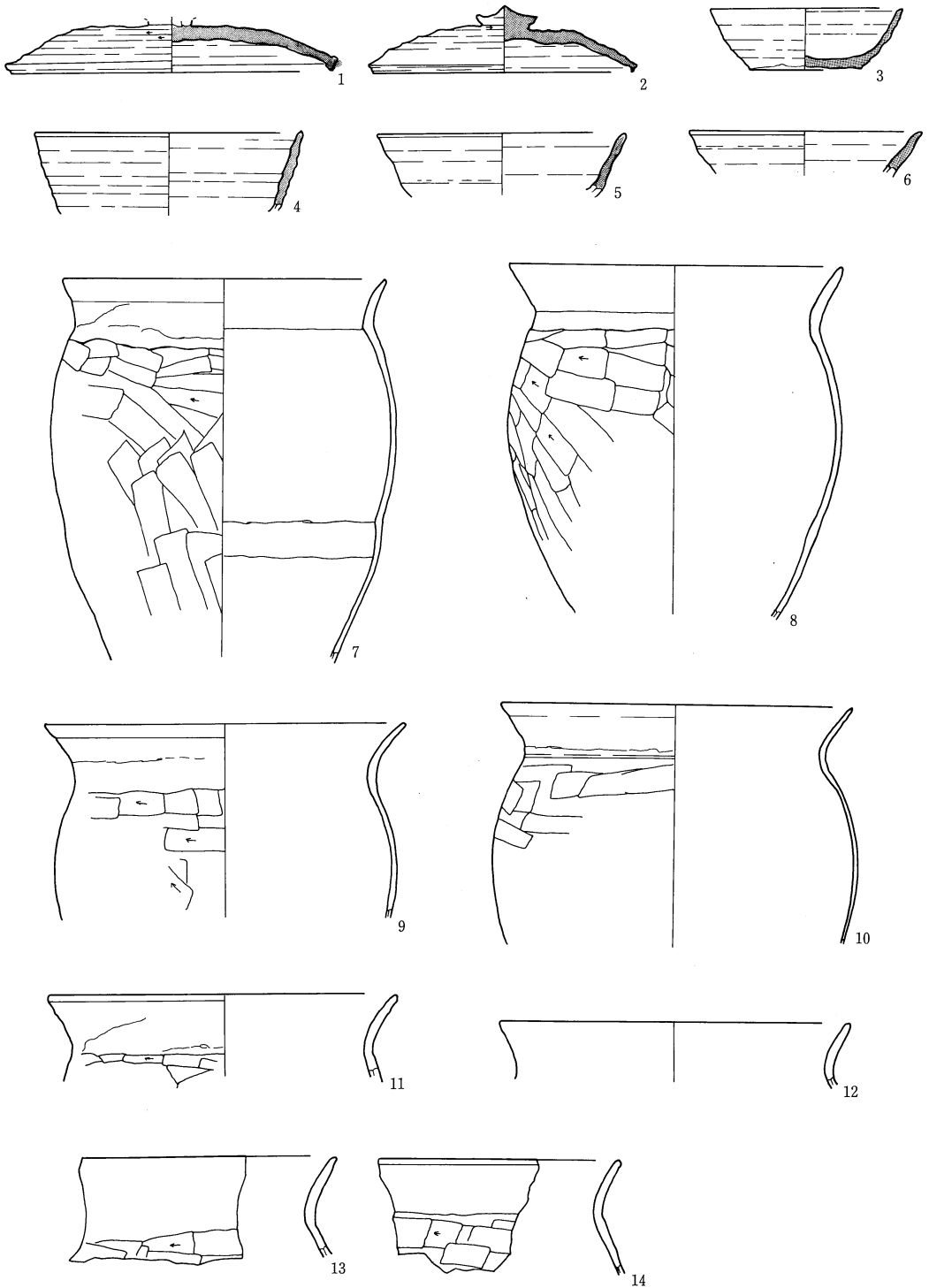
1層	(黒褐色土)	7.5YR 2/2	
2層	(黒褐色土)	10YR 2/3	7.5YR 3/2と10YR 6/8をブロック状に含む。埋土。
3層	(黒褐色土)	7.5YR 3/2	5 YR 4/4と7.5YR 5/6をブロック状に多量に含む。埋土。
4層	(黒褐色土)	10YR 2/3	2.5YR 3/4をブロック状に少量含む。埋土。
5層	(褐色土)	7.5YR 4/6	2.5YR 4/6をブロック状に多量に含む。埋土。
6層	(におい赤褐色土)	5 YR 4/4	5 YR 6/3の粘土主体層。
7層	(黒褐色土)	10YR 2/3	7.5YR 7/8と10YR 3/3をブロック状に含む。
8層	(赤色土)	10YR 4/6	10YR 3/3をブロック状に含む。
9層	(赤褐色土)	5 YR 4/6	粘土。焼けている。
10層	(赤色土)	10YR 4/6	10YR 3/4をブロック状に含む。
11層	(暗赤褐色土)	5 YR 3/4	焼土粒子を多量に含む。
12層	(褐色土)	10YR 4/4	貼り床層。10YR 3/2をブロック状に多量に含む。

第6図 聖原遺跡VIIH 2号住居址実測図

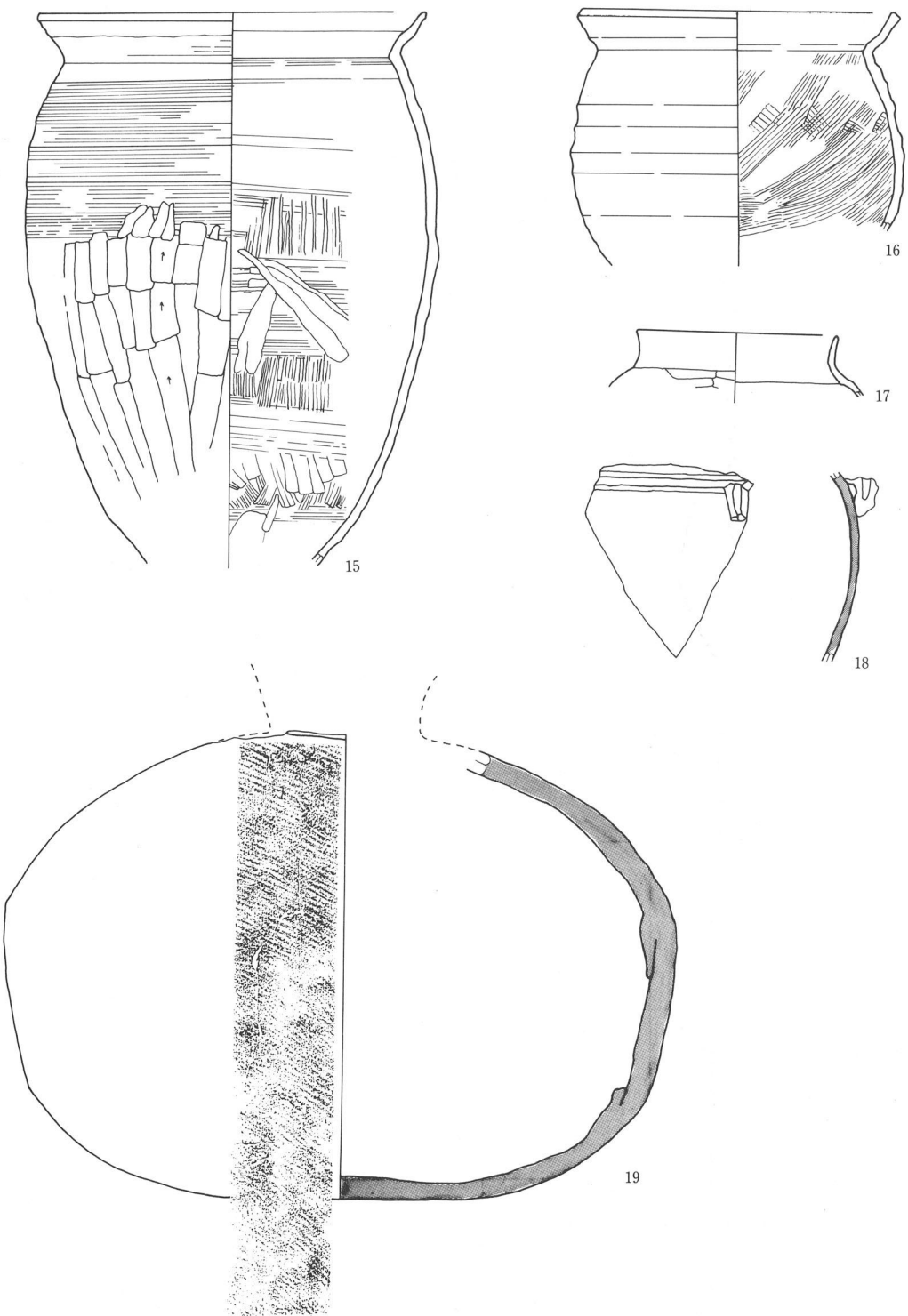
ら底部まで全面強い横ナデがみえる。また、在地の土器らしからぬ緻密で混入物も少ない胎土である。5の底部への変換点はまだ丸みを持つ。4は、須恵器高台付坏であろう。

第7図7~14は「武蔵型」、第8図15・16は「北信型」とよばれる土師器甕である。7は僅かコの字状に外反する口縁部をもつ。8~10が口縁部径と胴部径がほぼ等しいのに対して、7は最大径が胴部上半にある。15のロクロ整形による甕は長胴で外面の胴部下半は縦方向にヘラケズリ整形され上半部にはカキメ状の横ナデがみえる。内面は縦方向に櫛歯状工具による縦のナデその後横ナデがされている。16は短胴で胴部下半は指頭による押しえあるいはナデ調整されている。内面は櫛歯状工具により斜めにナデ調整される。17は、体部上半部に横方向のヘラケズリがみえる土師器小形甕である。18は須恵器四耳壺、19は須恵器横瓶である。横瓶は図示不可能であるが器厚の薄いものも1点出土している。

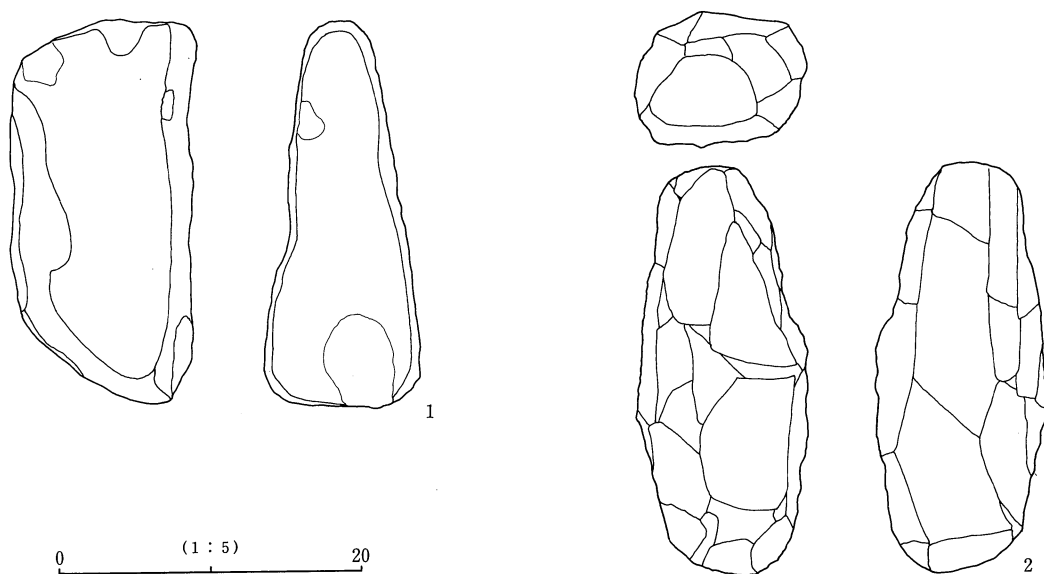
これらは、土師器甕や須恵器坏の特徴から奈良時代末から平安時代初頭に位置づけられよう。



第7图 聖原遺跡VIIH 2号住居址出土土器実測図



第 8 图 聖原遺跡VIIH 2 号住居址出土土器実測図



第9図 聖原遺跡VIIH 2号住居址出土石器実測図

3 聖原遺跡VIIH 3号住居址

本住居址の北側は調査区域外のため住居址の全貌は明らかでない。

平面規模は、南北推定5.7 m東西5.5 mを測る。平面形態は、コーナーが角張る方形を呈するものと思われる。南北軸方向は、N-5°-Wを指す。壁残高は深く、59cm~67cmを測る。

床面はほぼ全体が堅緻であった。床面下の掘り方は壁よりが15~20cmと深く、床面中央付近は僅か3~5cmを測り浅い。貼り床は暗褐色土ブロックを含む橙色土（地山の浅間第一軽石流）を主に用いている。

主柱穴はP1・P2・P3が相当するもので、調査区域外に予想される柱穴と方形に配されていたと想定できよう。深さはP1が84cm P2が74cm P3が67cmを測り、たいへん深い。

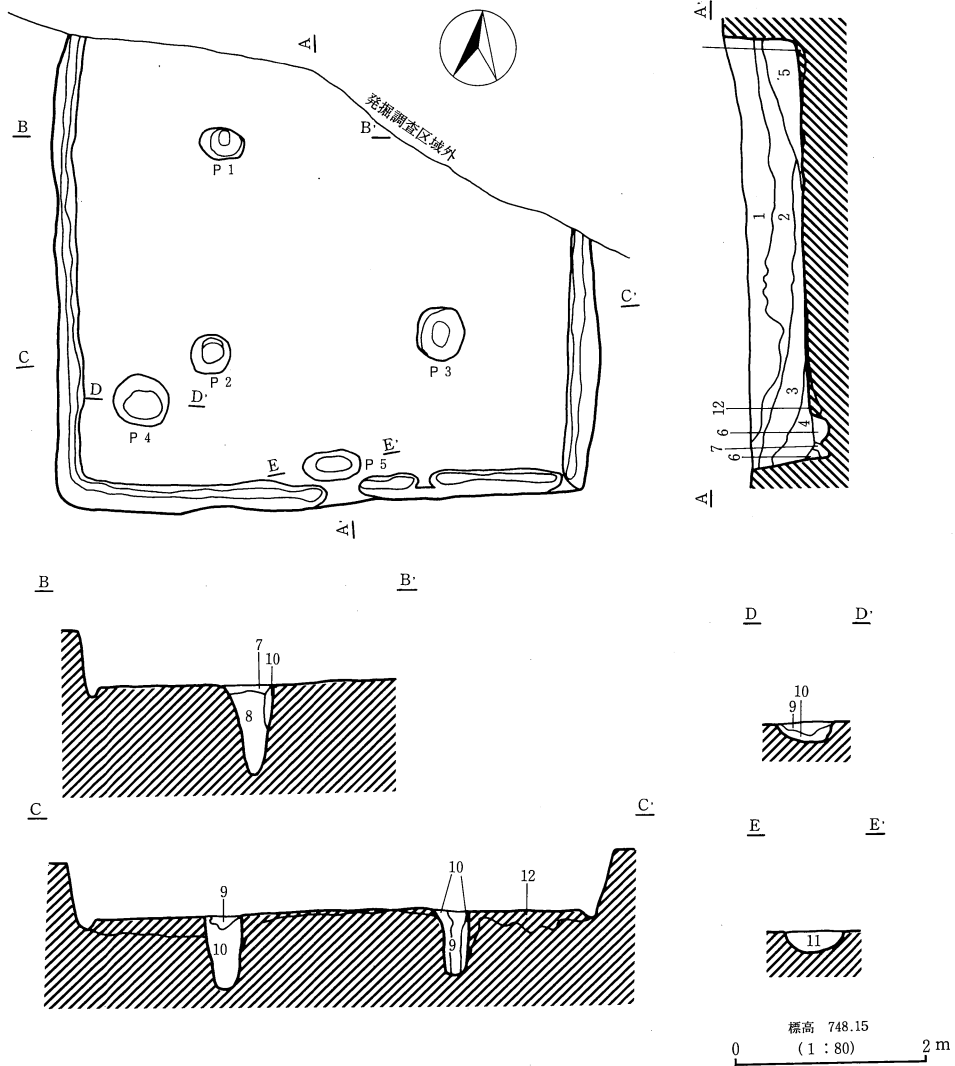
南壁中央直下に検出された楕円形のP4は南北30cm東西60cm深さ25cmの規模を持ち、入り口に関連した施設が存在が考えられる。南西の隅に深さ20cmの浅いP5が確認された。

壁溝がP4付近を除き各壁直下をめぐる。幅15~25cm深さ5~20cmを測る。

覆土は5層に分けることができた。3層には特に多く地山のロームや黒色土のブロックが多く含まれていた。2層以下は人為的埋土の可能性が高い。

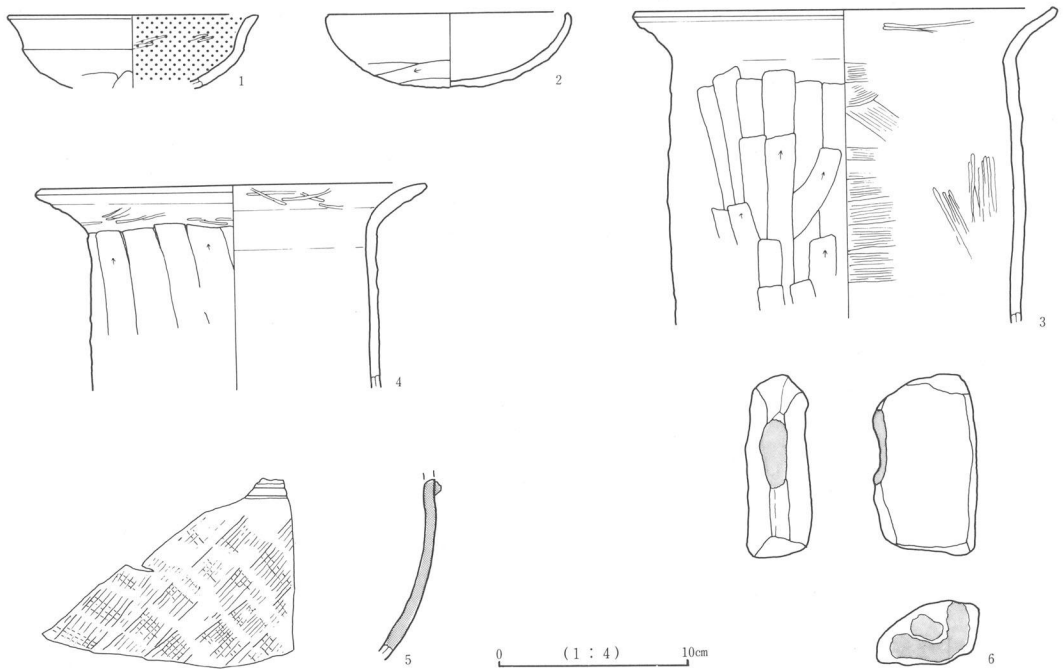
出土遺物には、土師器杯・甕、須恵器四耳壺、敲石がある。

第11図1~4・6は、覆土第2層から、5は覆土第1層の出土である。



1層	(黒褐色土)	10YR 2/2	ローム粒子・ロームブロック・パミスを含む。10YR 2/1をブロック状に含む。
2層	(極暗褐色土)	10YR 2/3	ローム粒子を多量に含む。パミスを含む。10YR 2/2をブロック状に少量含む。
3層	(極暗褐色土)	10YR 2/3	ローム粒子・ロームブロック・10YR 2/1をブロック状に多量に含む。
4層	(黒色土)	10YR 2/1	ローム粒子・パミス少量含む。
5層	(暗褐色土)	10YR 3/3	ローム粒子を多量に含む。ロームブロック・10YR 2/1をブロック状に少量に含む。パミス含む。
6層	(褐色土)	7.5YR 4/4	
7層	(暗褐色土)	7.5YR 3/4	7.5YR 2/2をブロック状に含む。
8層	(暗褐色土)	7.5YR 3/4	10YR 7/8と7.5YR 2/2をブロック状に含む。
9層	(にぶい黄褐色土)	10YR 4/6	10層 (明黄褐色土) 10YR 7/6
11層	(明黄褐色土)	10YR 7/6	10YR 4/6をブロック状に含む。
12層	(橙色土)	7.5YR 6/6	7.5YR 3/4をブロック状に少量含む。

第10図 聖原遺跡VIII 3号住居址実測図



第11図 聖原遺跡H3号住居址出土土器実測図

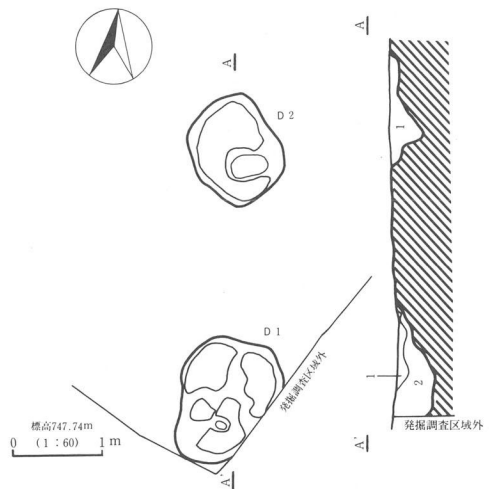
1は、古墳時代後期のメルクマールの外稜を持つ土師器坏である。口縁部は緩く外反しながら開き、外稜は明瞭でない。2は半球状の浅い形態のものである。

3・4は、器厚がやや厚く口縁部が大きく水平に近く開き、胴部は張りを持たず底部へ続く形態である。両者とも外面は大きく縦方向にヘラケズリされる。

本住居址の帰属時期を決定する遺物が乏しいが、第2層から出土した土器の様相から、古墳時代後期末かそれ以前であろう。

4 聖原遺跡VIIID 1号 ・D 2号土坑

土坑としたが底面の形状から掘立柱建物址の可能性が高い。D 1号土坑は南北120cm東西96cm深さ30cm、2号土坑は南北130cm東西120cm深さ40cmを測る。D 1号土坑から半球状の土師器坏小片、ロクロ整形の須恵器坏小片が、D 2号土坑からは土師器高台坏片、薄手の土師器長胴甕片が出土している。



- 1層 (極暗褐色土) 7.5YR 2/3 土師器・須恵器の小片出土。
- 2層 (暗褐色土) 7.5YR 3/3 黄褐色土(10YR 5/8)を多量に含む。黒褐色土(7.5YR 2/2)をブロック状に含む。

第12図 聖原遺跡VIIID 1号土坑・D 2号土坑実測図

III 下曾根遺跡 I

下曾根遺跡 I は佐久市の北端、小諸市と御代田町との境に展開する芝宮遺跡群の北東部に位置する。標高748mを測る。調査は鉄塔の付け替え部分を実施したため20㎡に満たない僅かな面積であった。調査区内で3軒の竪穴住居址が検出されたが1軒は基礎工事がおよばないため2軒について調査を行った。

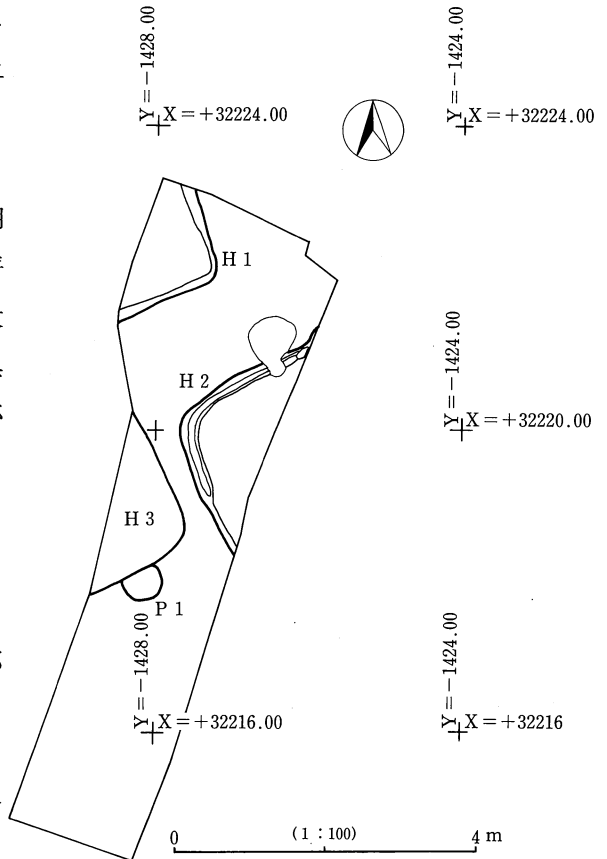
東に隣接して長野県埋蔵文化財センターが、上信越自動車道用地内を1992年度から3年の期間で調査を実施している。古墳時代後期から平安時代の竪穴住居址245軒、掘立柱建物址70棟大溝等が検出されている。土師器・須恵器・農具などの鉄器・銭貨・海獣葡萄鏡等多くの遺物が出土している。

1 下曾根遺跡 I H 1 号住居址

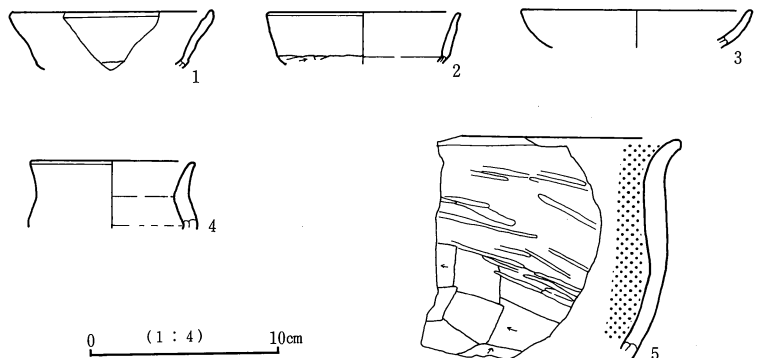
本住居址は南東コーナーと東壁・南壁の一部を検出したにすぎず、全貌は明らかでない。

東壁130cm南壁90cmを掘り下げた。壁高は45～55cmと深い。床面は明確に認められるほど非常に堅緻であった。床面下の掘り方は壁寄りよりも中央に向けて深い。貼り床は明黄褐色土を主に用いていた。遺構は、明黄褐色土（浅間第一軽石流）の上層である暗褐色土の上面で検出できた。

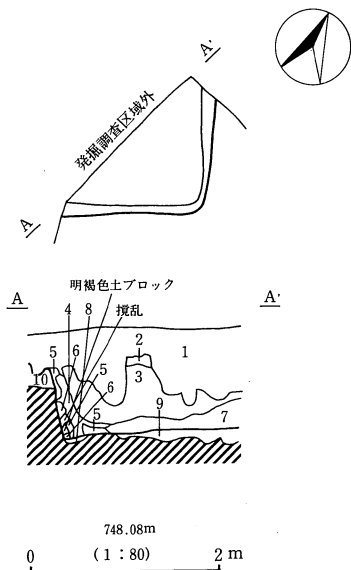
出土遺物で図示できたのは、土師器坏・鉢・小形甕、白磁碗である。



第13図 下曾根遺跡 I 調査全体図



第14図 下曾根遺跡 I H 1 号住居址出土土器実測図



- 1層 耕作土
- 2層 黒褐色土 7.5YR 2/2
- 3層 黒褐色土 7.5YR 3/2 人為的埋土 明黄褐色土 (10YR 6/8)・黒色土 (7.5YR 2/1)・にふい橙色土 (5YR 7/4)の小ブロックを多量に、炭を少量含む。
- 4層 極暗褐色土 7.5YR 2/3 人為的埋土 明黄褐色土 (10YR 6/8)の小ブロックを少量含む。
- 5層 暗褐色土 7.5YR 3/4 人為的埋土
- 6層 黒褐色土 7.5YR 3/1 人為的埋土
- 7層 黒褐色土 7.5YR 2/2 人為的埋土 明黄褐色土 (10YR 6/8)の小ブロックを少量含む。
- 8層 貼床下埋土
- 9層 貼床下埋土
- 10層 暗褐色土 10YR 3/3
- 11層 明黄褐色土 10YR 6/8 浅間第一軽石流 (地山)

第15図 下曾根遺跡IH1号住居址実測図

他に図示できないが、厚手の土師器甕・小形甕、坏、須恵器甕の小片が出土している。

第14図1・2は、土師器坏で外稜を持つ。4は内面がよく磨かれている土師器小形甕である。

6は内面黒色処理された鉢である。3は白磁碗であるが覆土上面より出土している。

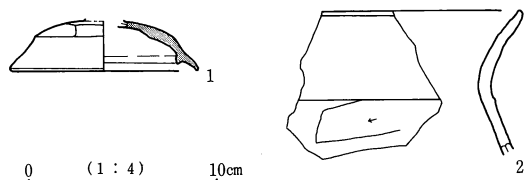
出土土器は、古墳時代後期後半に位置づけられる。

2 下曾根遺跡IH2号住居址

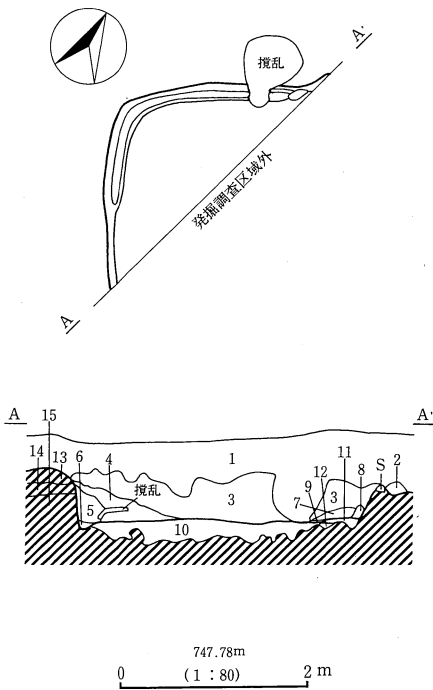
本住居址は、北東コーナーと西壁および北壁の一部を調査した。西壁190cm北壁200cmで壁残高は30~40cmを測る。北東コーナーは丸みをおびる。床面は堅緻であり、明確に確認できた。掘り方は壁直下まで確認できた。貼り床は、明黄褐色土を主に用いている。

幅15cm深さ4~6cmの周溝が、西壁の一部から北壁をめぐる。掘り方が埋め立てられた後に周溝が掘りこまれている。北壁の東端には灰や粘土がみられ、この位置にカマド左袖があったものと思われる。

出土遺物は、土師器厚手の甕・小形甕・内



第16図 下曾根遺跡IH1号住居址出土土器実測図



- 1層 黒褐色土 7.5YR 3/2
- 2層 灰褐色土 5 YR 4/2 カマド煙道の破壊されたもの。
- 3層 黒褐色土 7.5YR 2/2 埋土 (橙色土 (7.5YR 6/8)・灰白土 (7.5YR 8/1) の小ブロックを多く含む。
- 4層 黒褐色土 7.5YR 2/2 埋土 (橙色土 (7.5YR 6/8) の大ブロックを少量含む。
- 5層 暗褐色土 7.5YR 3/3 埋土 (橙色土 (7.5YR 6/8) の小ブロックを多く含む。
- 6層 褐色土 7.5YR 4/4 (周溝覆土)
- 7層 黒褐色土 7.5YR 3/1
- 8層 明黄褐色土 10 YR 7/4 粘土 (カマド左袖) 破壊されている。
- 9層 黒色土 10 YR 2/1
- 10層 埋土 堅い。明黄褐色土を主に用いている。
- 11層 暗褐色土 10 YR 3/4 カマドの埋土
- 12層 黒褐色土 10 YR 3/2 カマドの埋土
- 13層 黒褐色土 10 YR 2/2
- 14層 暗褐色土 10 YR 3/3
- 15層 明黄褐色土 10 YR 6/8 浅間第一軽石流 (地山)

第17図 下曾根遺跡H2号住居址実測図

面黒色処理された外稜を有する坏・外稜を有する坏、須恵器甕・長頸壺・蓋・坏がみられる。

第16図1は、須恵器蓋で内面にかえりを有するものである。外面体部上部にはヘラケズリがみえる。2は土師器長胴甕で口縁部外反し、厚手の器厚である。

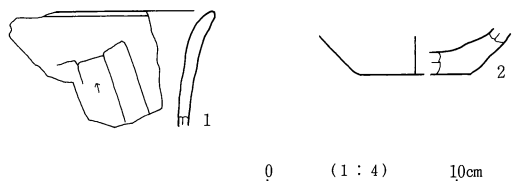
出土土器は少量ではあるが、古墳時代後期後半に位置づけられよう。

3 下曾根遺跡 I H 3 号住居址

本住居址は、平面形態の確認にとどまった。南壁150cm東壁190cmを測る。南壁に重複のみられるピットは、本住居址よりも古いものである。

第18図に図示した土器は、H3号住居址覆土上面から出土した。

1は土師器甕で外面縦方向のヘラケズリ内面は口縁部ヨコナデ、胴部はナデ調整されている。2は土師器甕である。



第18図 下曾根遺跡H3号住居址出土土器実測図

IV 前藤部遺跡 2

前藤部遺跡 2 は、試掘調査を行ったものの遺構・遺物は検出されなかった。

本遺跡は、1985年に株式会社大草本社が、資材置き場造成工事を計画したことに起因して試掘調査が実施されている。(前藤部遺跡 1)試掘調査は39,869㎡という広大な面積であり、幅 2 m のトレンチが14本設定されている。試掘調査面積は4,964㎡であった。

確認された遺構は、住居址22軒、溝状遺構25基、土坑20基等がある。住居址は覆土上面から出土した土器から奈良時代～平安時代末と予想された。出土遺物は、土師器、須恵器、瀬戸灰彩、土鍋などであった。住居址等の確認面は、調査地点の高所にみられた洪水砂層の上面であった。

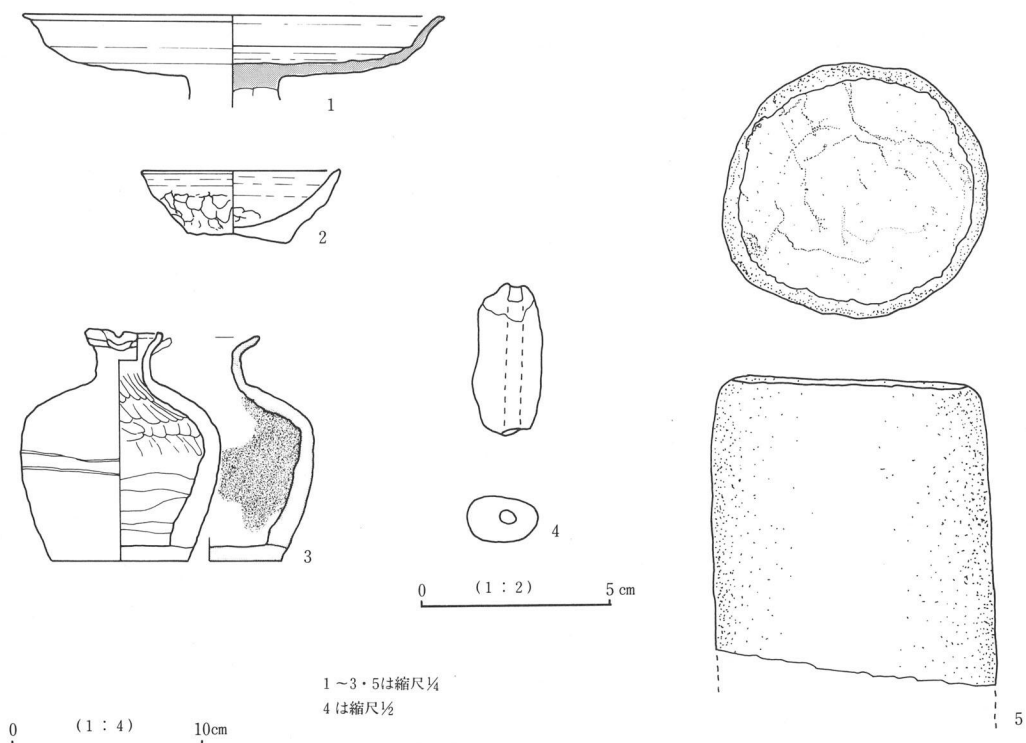
また、1993年度には、北陸新幹線の工事に関して長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施している。調査地点は、1985年度の佐久市教育委員会の試掘調査地点北端にあたり、平安時代前半～中頃の竪穴住居址 4 軒と溝状遺構 1 基が検出されている。いずれも洪水砂層の上面から検出されたという。

第20図 1～5 は、1985年度の試掘調査時に出土したものである。

1 は須恵器高坏で、東西長580cmを測る H 1 号住居址 (仮称) 覆土上面より出土した。同住居址



第19図 前藤部遺跡 2 試掘調査地点近景 (西方から)



第20図 前藤部遺跡2土遺物実測図（1985年度試掘調査）

からは、底部糸切りをみせる須恵器坏数点、さらに底部静止糸切りの土師器坏も出土している。それらは、平安時代初頭の様相を示している。

2の土師器坏は、東西長H12号住居址（仮称）覆土上面より出土した。器形全体がいちじろしく歪んでおり、体部下半には指頭によるナデ調整がうかがえる。

3はH15号住居址（仮称）覆土上面より出土した片口短頸瓶子で、胎土灰白色（N0/8）の瀬戸灰釉かと思われる。外面全体と内面頸部あたりまで灰白色（10Y8/2）の釉がかかる。内面の肩部から胴部下半にかけて浅黄色（2.5Y4/7）の有機質と思われる付着物がみえる。器高は12.2cm、口径3.8cm、底径7.1cm、最大径は肩部にあり10.5cmを測る。

5は素焼きの土錘でH15号住居址（仮称）覆土上面より出土した。長さ4cmで、断面は楕円形を呈する。付近の佐久市鑄師屋遺跡群前田遺跡古墳時代後半のH112号住居址床面からも土錘が2点出土し、佐久市瀬戸の和田上遺跡群和田上南遺跡平安時代のH2号住居址からも出土している。

6は21号住居址（仮称）覆土上面より出土した。断面円形を呈した円筒形の石製品である。砂岩で表面精巧にみがきあげられている。



1 聖原遺跡Ⅶ調査地点全景（南方から）



2 聖原遺跡Ⅶ調査地点全景（西方から）



1 聖原遺跡VIIH 1号住居址全景（南方から）



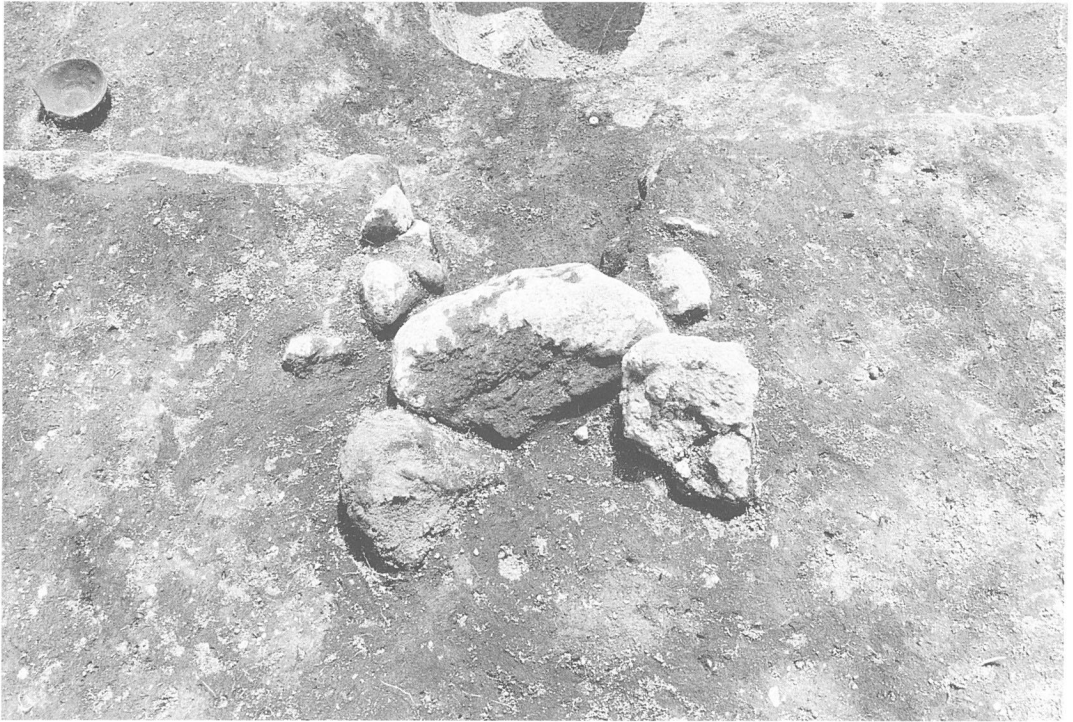
2 聖原遺跡VIIH 1号住居址掘り方全景（南方から）



1 聖原遺跡VIII 1号住居址カマド全景（南方から）



2 聖原遺跡VIII 1号住居址カマド全景（南方から）



1 聖原遺跡VIIH 1号住居址カマド全景（北方の上方から）



2 聖原遺跡VIIH 1号住居址カマド袖部および煙道部の芯に組まれた石組（上方から）



1 聖原遺跡VIII H 1号住居址カマド石組（南方から）



2 聖原遺跡VIII H 1号住居址カマド掘り方（南方から）



1 聖原遺跡VIIH 2号住居址全景（南方から）



2 聖原遺跡VIIH 2号住居址遺物出土状態（南方から）



1 聖原遺跡VIIH 2号住居址遺物出土状態（南方から）



2 聖原遺跡VIIH 2号住居址カマド全景（南方から）



1 聖原遺跡VIIH 2号住居址カマドに残る支脚石（南方から）



2 聖原遺跡VIIH 3号住居址全景（西方から）



1 聖原遺跡VIII 3号住居址全景（東方から）



2 聖原遺跡VIII 3号住居址土層（東方から）



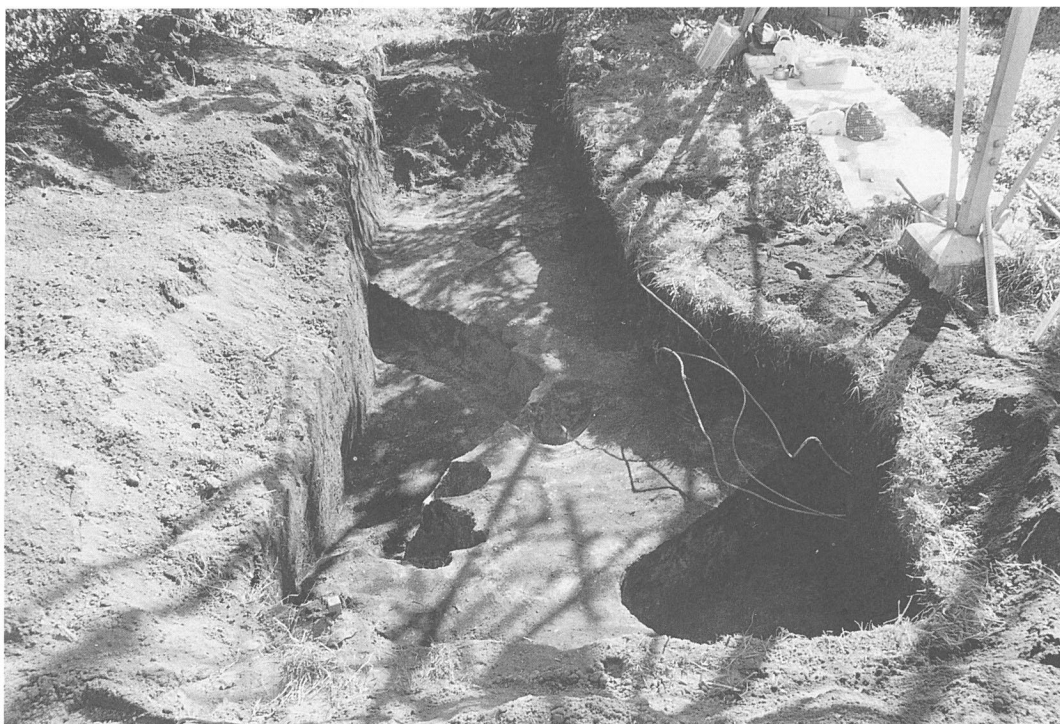
1 聖原遺跡VIIID 1号・D 2号土坑全景（北方から）



2 聖原遺跡VIIID 1号土坑（北方から）



1 下曽根遺跡 I 調査スナップ全景（北東方から）



2 下曽根遺跡 I 調査地点全景（北方から）



1 下曾根遺跡 I H 1 号住居址全景（北方から）



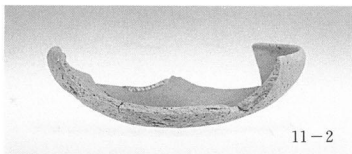
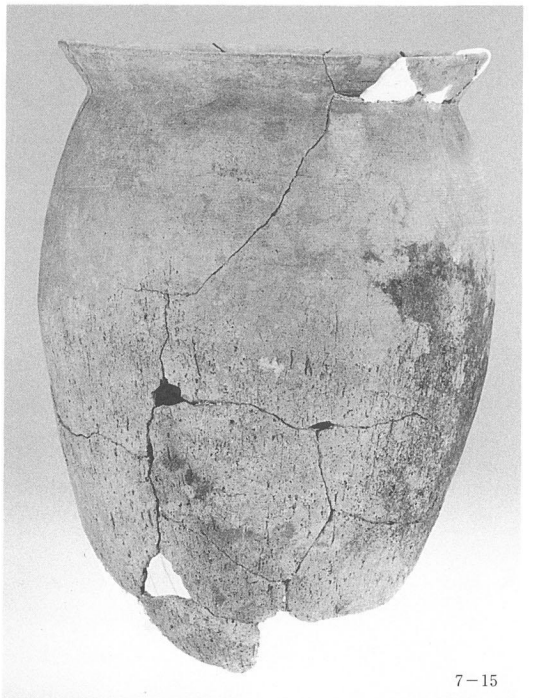
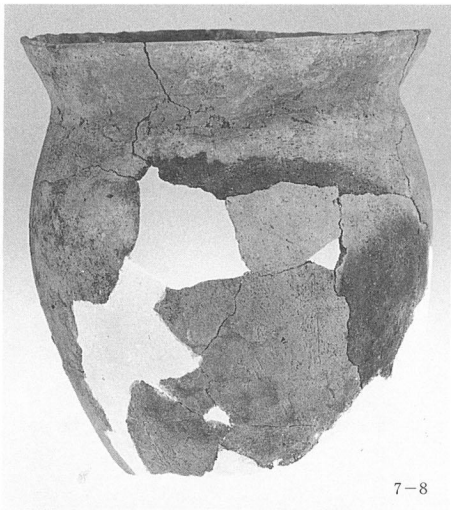
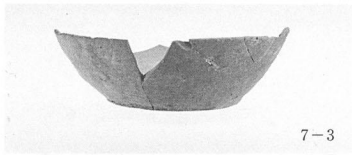
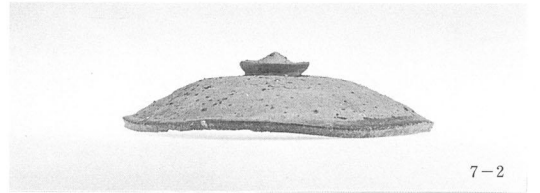
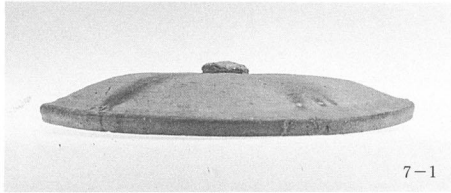
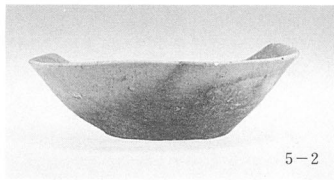
2 下曾根遺跡 I H 2 号住居址全景（南方から）



1 下曽根遺跡IH2号住居址全景（北方から）



2 下曽根遺跡IH2号住居址掘り方全景（北方から）



佐久市埋蔵文化財調査報告書	第1集	『金井城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第2集	『市内遺跡発掘調査報告書1990』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第3集	『石附窯址群III』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第4集	『大ふけ遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第5集	『立科F遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第6集	『上曾根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第7集	『三貫畑遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第8集	『瀧の下遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第9集	『国道141号線関係遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第10集	『聖原遺跡II』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第11集	『赤座垣外遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第12集	『若宮遺跡II』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第13集	『上高山遺跡II』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第14集	『栗毛坂遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第15集	『野馬久保遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第16集	『石並城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第17集	『市内遺跡発掘調査報告書1991』(1月～3月)
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第18集	『西曾根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第19集	『上芝宮遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第20集	『下聖端遺跡III』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第21集	『金井城跡III』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第22集	『市内遺跡発掘調査報告書1991』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第23集	『南上中原・南下中原遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第24集	『上聖端遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第25集	『上久保田向IV』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第26集	『藤塚古墳群・藤塚II』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第27集	『上久保田向III』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第28集	『曾根新城V』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第29集	『山法師遺跡B、筒村遺跡B』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第30集	『市内遺跡発掘調査報告書1992』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第31集	『山法師遺跡A、筒村遺跡A』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第32集	『東ノ割遺跡』

佐久市埋蔵文化財調査報告書第33集

聖原遺跡VII 下曾根遺跡 I 前藤部遺跡 2

1994年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒384-01 長野県佐久市大字中込3056

埋蔵文化財課

〒385 長野県佐久市大字志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 ㈱佐久印刷所
